取材日：2017年3月23日

Home Health Care
HHC
在宅医療

明石市医療圏

診療所医師を病院がバックアップする在宅医療。主・副主治医の２人体制で「あんしん」の輪を。

Point of View

① 外来診療メインの診療所が、無理なく効率的に在宅医療を行える環境を構築
② 訪問看護ステーションがコーディネーターとして機能
③ 副主治医も必ず一度は訪問するのが絶対のルール
④ 入院が見込まれる場合は、病院の医師が副主治医を担当する場合もある

平崎内科循環器科クリニック 院長	鈴木内科クリニック 院長	井上外科胃腸科	医療法人社団医仁会ふくやま病院 理事長	兵庫県立がんセンター 緩和ケアセンター長／緩和ケア内科・麻酔科部長
平崎 智士先生	鈴木 光太郎先生	井上 知久先生	譜久山 剛先生	池垣 淳一先生

グループでの在宅医療により負担は軽減、安心は大きく

行政も医療関係者も市民も、在宅医療充実の必要性は誰もが認めるところだ。しかし現状ではまだ、在宅での療養や看取りに対して、不安を覚えずにいられる市民は少ない。そうした時代の中で、明るい展望を感じさせてくれるのが、兵庫県明石市の「在宅医療ネットワークあんしん」（以下、ネットワークあんしん）の取り組みだ。

2013年の秋から稼動しているネットワークあんしんは、３人の診療所医師の互助グループに端を発したものである。立ち上げメンバーのひとり、井上外科胃腸科の井上先生が経緯について語る。

「高齢化が進むにつれて、在宅医療のニーズは増える一方です。外来で長く診ている患者さんは、続けて在宅でも診て差し上げたいという思いと裏腹に、ひとりの力には限りがあると痛感し始めていました。そんな折り、平崎内科循環器科クリニック院長の平崎先生から、鈴木内科クリニック院長の鈴木先生と私に『一緒に在宅をやりませんか』とお声がけいただき、３人で始めることになったのです」（井上先生）

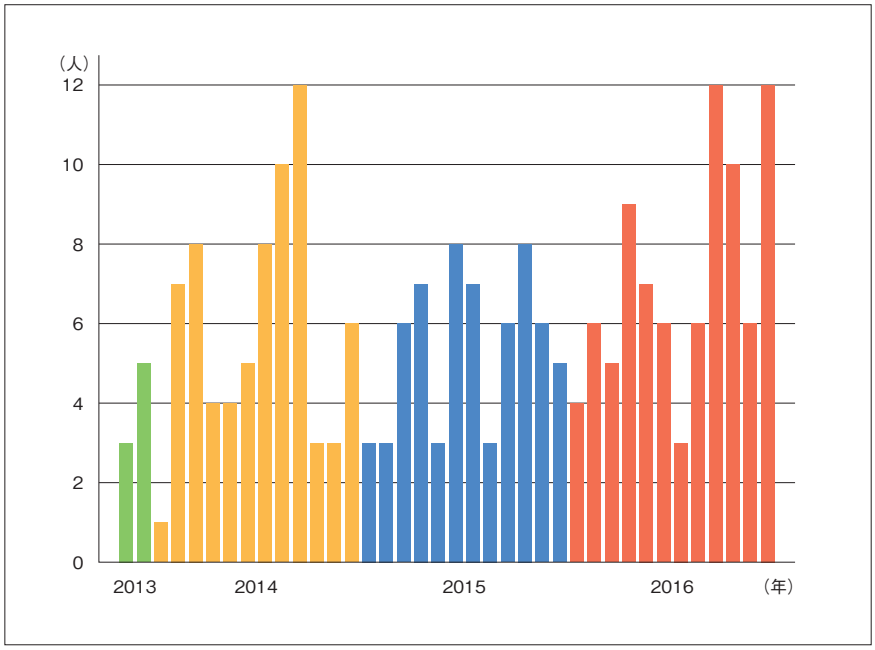
単独では限界ギリギリでも、グループでならお互いに助け合って少しは楽に在宅での診療ができる。同時に在宅患者は、必要ならいつでも必ず誰か医師が来てくれるといった安

左から平崎先生、鈴木先生、井上先生、譜久山先生、池垣先生

心を得られる。そういう在宅医療をめざしてのスタートだった。

【資料1】

月別紹介患者数の実績（2013年11月～2016年12月）



ルールは最小限、志を一にし医師たちが緩やかにつながる

以来３年半余りを経て、現在、ネットワークあんしんは、７診療所の７人の医師と、ふくやま病院など４つの協力病院、泌尿器科、皮膚科、歯科の協力診療所、７つの訪問看護ステーション、２つの薬局で構成されており、着実に実績を重ねている（【資料１】）。ネットワークあんしんの発案者、平﨑先生が説明する。

「外来診療をメインとする診療所が無理せず効率的に在宅医療を行うためのネットワークの構築――このコンセプトに賛同してくださる先生方に加わっていただいた結果です。スタート時に、ちょうど開設したばかりの訪問看護ステーションと協力体制ができ、コーディネーター機能を果たしてもらっています」（平﨑先生）

コーディネーターは、患者から在宅医療の要請があると、各医師が自己申告する受け入れ可能な患者数や医師の専門性、東西に細長い明石市のどの地域の患者かなどを配慮して適切な医師に受け入れを打診し、相談のうえ主治医と副主治医を決める。

鈴木先生が、主治医と副主治医のルールについて話してくれた。

「私たちの絶対と言っていいルールは、副主治医が必ず患者宅を訪問して顔を合わせておくことです。緊急時に初めての医師では、患者さんやご家族にとっては心細く、納得もいかないでしょう。ですから、書類上だけの副主治医ではなく、主治医とペアで患者さんを担当する者として最低、一度の訪問を決まりにしています」（鈴木先生）

このルール以外の決まりはそう多くはなく、主治医と副主治医の担当をなるべく同数にする、月１回のミーティングで治療方針の確認や相談をする程度だという。厳しい縛りがあるほうが、ネットワークがうまく機能するケースも確かにある。しかし、志の共有さえできていれば緩いつながりであっても、いや緩いつながりのほうが医師同士の関係が良好になり、同じ方向を見ていける場合もあるだろう。

がんセンターが診療所医師の在宅緩和ケアをバックアップ

安心の確保の意味では、ネットワークをバックアップする、兵庫県立がんセンター（以下、がんセンター）の存在は大きい。

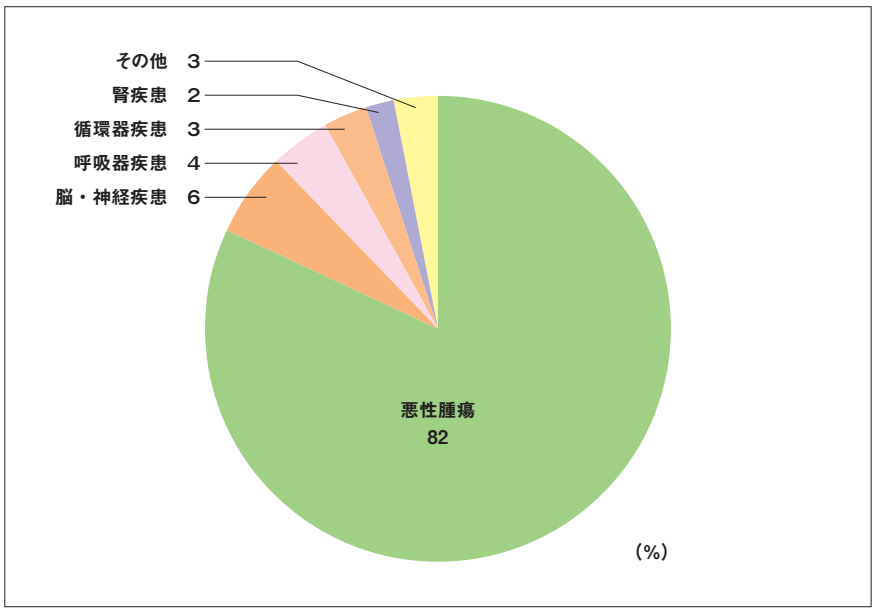
がんセンターの池垣先生は、緩和ケアセンター長、緩和ケア内科・麻酔科部長として、終末期の連携のあり方を探ってきた。

「地域のがん患者をしっかり診ようとがんばっておられる診療所の先生方のために、がんや緩和ケアを専門とする私たちにできることは何か。そう考えて在宅での診療で迷ったり困ったりしたときなどに、いつでも電話で相談できる緩和ケア相談ホットラインをつくりました」（池垣先生）

2014年４月、がんセンターは４床の緊急緩和ケア病床を備えた緩和ケアセンターを開設した。緩和ケアセンターでは、緊急時のベッドの提供

【資料2】

受け入れた患者の疾患の内訳



だけでなく、地域の診療所の医師に向けた緩和ケア研修が行われ、さらに病床登録した患者を診ている医師や、研修を受けた医師向けの相談窓口が設けられている。

「緊急の相談をいつでも受けられるように、携帯電話を肌身離さず持っています。診療所の先生方に安心感を与えられる存在になっていれば、うれしい限りです」（池垣先生）

ネットワークあんしんの稼動から現在にいたるまで、がんセンターからネットワークあんしんに紹介された患者は、同ネットワークに新規で紹介された患者数の約４割を占め、また、ネットワークあんしんで受け入れてきた疾患別の延べ人数の割合では、悪性腫瘍が８割ほどにもなるという（【資料２】）。

いつでも協力を惜しまない中規模病院や各科診療所

「ただ、がん緩和ケアの患者さんが在宅ですごす期間は、短期がほとんど。がん末期の場合でも、できる限りのところまで自宅で療養し最期はやはり病院で迎えるというケースは多いですし、逆に末期になって自宅に戻られる場合もありますが、いずれにしても私たちが診る期間は、ほぼ週単位の短さです」（鈴木先生）

そのため、延べ人数ではなく継続的に診ている患者数では、がんよりも慢性疾患のほうが多いようだ。

「慢性疾患の患者さんを長期にわたり在宅で診ていく場合、我々を助けてくださるのは協力病院の先生方です。急変時や検査が必要になったとき、ご家族が介護に疲弊したときのレスパイト入院など、電話１本で入院を引き受けてくださる協力病院は心強い味方です」（平﨑先生）

協力病院のひとつ、ふくやま病院理事長の譜久山先生が話す。

「当院を含めて100～200床規模の４病院が協力病院となっており、在宅患者の情報は常に入手できるようになっていますから、何かあれば、いつでもベッドを提供できます」（譜久山先生）

ふくやま病院は、2016年の移転新築後、病床の一部を地域包括ケア病床や緩和ケア病床として確保している（【資料３】）。他の協力病院でも、当直室にネットワークあんしんの患者リストを貼り、「このリストの患者さんは、いつでも断らずに受け入れるように」と指示しているなど、協力体制は万全だ。

「在宅で療養していても、最期は入院を希望する患者さん、あるいはレスパイト入院させたいというご家族など、いずれは当院に入院予定の患者さんをあらかじめ把握しておくことは、私たちにとってたいへん有意義です。また、必要であれば当院の医師が副主治医を務めるケースもあります」（譜久山先生）

入院や大きな検査を要する場合に

【資料3】

ふくやま病院の緩和ケア病床

【資料4】

月例ミーティングの様子

は協力病院が活躍するが、協力診療所のサポートも、ネットワークあんしんがうまく機能するためには欠かせない。

平﨑先生は循環器、鈴木先生は糖尿病、井上先生は外科と消化器といった具合に、ネットワークの７人の医師は、それぞれ専門や得意分野が違うので、それを勘案して主治医や副主治医を決めているのは前述したとおりだが、欠けている泌尿器科、皮膚科、歯科については、協力診療所の専門医たちが、必要に応じて訪問診療をしてくれる仕組みになっている。

訪問看護や薬局も参加して月例ミーティングで情報共有

ネットワークあんしんには、医療機関以外に、前述のとおり訪問看護ステーションと薬局も加わっている。薬局は、ネットワークあんしん参加後に本格的な訪問薬剤管理指導を始め、今では点滴やバルーンカテーテルなどの医療材料の共同購入にも応じてくれている。訪問看護ステーションは、コーディネーターを務めるところも含めて７つの事業所が明石市の各エリアに点在しており、医師の訪問診療の間を埋めるかたちで患者のケアにあたっている。

そして、これら施設の診療所医師、病院医師、看護師、薬剤師が一堂に会するのが月１回開かれる定例ミーティングだ（【資料４】）。コーディネーターの司会のもと、現在の患者について各主治医が報告し、看護師や薬剤師が補足する。副主治医や他の専門医からの質問や意見、アドバイスなどもあり、率直で活発なやり取りがなされる。

「メンバーの誰もが、このミーティングを面倒がらずに、むしろ興味を持って楽しんで参加してくださっているのも、ネットワークあんしんの特徴でしょう」（井上先生）

最後に、稼働開始から５年目を迎えようとしているネットワークあんしんの今後について、それぞれの先生方に取り組むべき課題やビジョンを伺った。

「明石市の東西に長い地理的条件の中で、東寄りエリアの在宅医療をもう少し充実させて、全市で『在宅医療は安心』と言えるような状況になればと思います」（井上先生）

「明石市と似たようなバックグラウンドを持つ地域の医療関係の方々には在宅医療連携のひとつのモデルとして、参考にしていただけるのではないでしょうか」（譜久山先生）

「今後の課題のひとつは、情報共有ツールです。

今は、メールとファクス、急ぎの場合は電話でのやり取りをしていますが、ICT時代ですから、何かより効率的で確実で安全なツールがないか、現在いろいろと模索しているところです」（鈴木先生）

「当院では、ケアマネジャーの皆さんに向けた勉強会を随時、開催していますが、地域の介護関連の方々全般のレベルアップを図って、医療と介護・福祉の間のギャップを埋め、連携を進めていきたいと思います」（平﨑先生）

ネットワークあんしんは、お互いの信頼関係をベースに、地域の患者のさらなる安心のため、今後も意欲的に活動を展開していくだろう。

平崎内科循環器科クリニック
〒674-0081
兵庫県明石市魚住町錦が丘4-7-2
TEL：078-959-8326

鈴木内科クリニック
〒674-0074
兵庫県明石市魚住町清水2265
TEL：078-942-8811

井上外科胃腸科
〒673-0041
兵庫県明石市西明石南町2-21-1
TEL：078-922-3595

医療法人社団医仁会 ふくやま病院
〒673-0028
兵庫県明石市硯町2-5-55
TEL：078-927-1514

兵庫県立がんセンター
〒673-8558
兵庫県明石市北王子町13-70
TEL：078-929-1151

（審）17Ⅶ106